

愛知県立芸術大学 平成 30 年度「教員による自己点検・評価シート」(自己評価)

記述についての報告書

愛知県立芸術大学 大学評価作業部会

愛知県立芸術大学(以下、「本学」と記す。)では、「教員による自己点検・評価シート(以下、自己点検・評価シート)」を平成 21 年度より実施しています。年度当初に各教員(客員教授を除く専任教員)が各自、「研究活動」「教育活動」「大学運営」「地域貢献」について目標と計画を立て、当該年度末に自己評価をするものです。

「30 年度自己点検・評価シート」は、各教員が年度当初に「計画・目標」を記載し、それをもとに 31 年 2 月初旬に「実績・自己評価」を記入して提出しました。

以下は、30 年度の「教員による自己点検・評価シート」の報告です。

■美術学部

美術学部では専任教員(客員教授・育児休業 2 名を除く)45 名中 45 名の教員が「自己点検・評価シート」を提出しました(回収率 100%)。

・研究活動

各教員は「計画・目標」において、それぞれの専門分野における研究内容や具体的な制作・研究成果の発表(展覧会・学会活動・科学研究等)・海外研修・受託事業・産学連携事業・研究論文・プロジェクト研究などについて記述しました。「実績・自己評価」については、大半の教員が「計画どおり実行し目標を達成した」あるいは「おおむね達成した」とする評価をしています。教員によっては新たな研究計画が年度半ばに加わるなど活発な状況が窺えます。

・教育活動

各教員は「計画・目標」において、学部、大学院、他大学での授業科目を列挙して計画を示し、その目標を「個性を尊重し、その能力を引き出す。」と記述しました。国際交流による学生の派遣や受け入れ、社会に積極的な参加を促すなど、実践的で視野の広い指導が多く見受けられます。また、記載内容から大学院博士前期課程・後期課程における指導の重要度が増していることが窺えます。領域をまたいだ指導内容も増加し、新たな研究の成果が期待できます。「実績・自己評価」において、「計画どおり実行し目標を達成した」としています。その内容としては「評価」として指導生の公募展受賞など社会的な成果・実績の記載が増えています。教員が熱意を持って学生と共に研究活動に取り組んでいることが伝わってきます。

・大学運営

各教員は「計画・目標」において、担当する各委員会、役目などを記載しました。ほとんどの教員は複数の委員会を兼任し、委員会にまったく関わらない教員はありませんでした。「実績・自己評価」において、計画どおり実行し目標を達成したとして、大半の教員が「委員として大学運営に

積極的に従事した。」と記載しています。委員会の統合、再編を行い委員会数は減りましたが、新たに出生者数の減少や公立美術大学の増加などにより、質の高い受験生の確保が今後の課題となり、数多くの進学ガイダンスへの参加や美術科の在る高校への出前授業などの業務が増加しています。また、全学広報プロジェクトチームや新専攻の設立準備委員会等が設置されました。未だに多くの委員会を兼務している状況も明らかです。

・社会貢献

各教員は、各種審査委員、学外講師・講演、展覧会企画・運営、サテライト講座、文化財団などの委員、ギャラリートーク（アーティストトーク）、ワークショップなど、様々な形で本学の教員として社会に関わり地域貢献に努めています。地域関連事業、地域再生の取り組み、子供教育講座や障害者美術教育支援など社会から求められる内容も幅広い項目にわたります。地域関連事業における愛知芸大の関わりが緊密になっていることが窺えます。「自己評価」においては多くの教員が「社会とアートを繋ぐ活動を精力的に行い充実した年度であった。」として高い評価をしました。

■ 音楽学部

客員教授を除く専任教員 36 名全員が「自己点検・評価シート」を提出しました（回収率 100%）。

・研究活動

各教員は「計画・目標」において、それぞれの専門分野における研究内容や具体的な創作・研究・演奏会・学会活動・執筆・プロジェクトなどについて記述しました。「実績・自己評価」については、大半の教員が「予定通りおこなった」あるいは「おおむね達成した」とする評価をしています。今年度取組んだ複数の研究活動についてそれぞれ個別に評価している教員が多く、客観的で明快な記載が定着してきました。研究に取り組むための十分な時間や環境の確保が困難であった、当初の計画から発展、あるいは計画を上回って達成した、また予期せぬ成果が得られた、等の自己評価も見られました。

・教育活動

各教員は「計画・目標」において、学部、大学院、他大学での担当科目を列挙して計画を示し、その内容と目標を記述しました。「実績・自己評価」において、計画どおり実行し目標を達成したとして、9割程度の教員が「高い評価」「概ね充足との評価」をしています。各種委員会や学内業務の多さから、新たな教育活動への取り組みを企図しつつも達成半ばである・時間不足である、とした教員はこれまでの年度より減少し、有効な設備活用・時間運用による着実な指導が行き渡ってきていることが見て取れました。

・大学運営

各教員は「計画・目標」において、担当する各委員会、役目などを記載しました。ほとんどの教員は複数の委員会を兼任し、委員会にまったく関わらない教員はありませんでした。「実績・自己評

価」において、計画どおり実行し目標を達成したとして、大半の教員が高い評価と中程度の評価をしています。小規模な学部ゆえに一人ひとりの教員が多くの委員会を兼務しており、大学運営上の担当責任は大きいですが、大学メールやUNIPAの活用、また会議書類の電子化に伴い、多様な業務をスマートにこなしていく状況が進展していることも見逃せません。

・社会貢献

各教員は、コンクール審査員、学外講師、演奏公演、演奏会企画・実行委員、放送出演、文化団体主催講座、行政機関諮問委員、ワークショップ参加など、様々な形で地域貢献に努めています。「計画」の具体的な記載がなかった教員が僅かですがありました。「実績・自己評価」において、9割近くの教員が高い評価と中程度の評価をしました。

■まとめ

本学の教員評価規程に則って、平成31年3月14日に開催された「平成30年度教員評価会議」において、「自己点検・評価シート」を主たる資料として当該年度の教員評価対象者が選考され、27名（美術15名、音楽12名）の教員が今年度の教員評価対象者として選出されました（評価対象者は全教員の34%）。

この「自己点検・評価シート」の記入は平成21年度から始まり、10年を経て本学教員の自覚的な取り組みの中に定着してきました。表記の内容・分量などが過不足なくなされ、提出期限についてもほぼ守られています。

各自が自身の活動を大学における職務に生かすために点検・評価をし、自己の向上と大学の質保証に努める、という「教員による自己点検・評価」の大目的が達成されていると思います。